



TITLE:

新刊紹介: 松林正己著, 続・図書館はだれの
ものか-図書館の未来を求めて(中部大学ブッ
クシリーズアクタ13), 中部大学, 2010.3, 風媒
社発売, 定価700円(税別), 107p, 21cm,
ISBN978-4-8331-4074-4

AUTHOR(S):

野間口, 真裕

CITATION:

野間口, 真裕. 新刊紹介: 松林正己著, 続・図書館はだれのものか-図書館の未来を求めて(中部大学ブックシリーズアク
タ13), 中部大学, 2010.3, 風媒社発売, 定価700円(税別), 107p, 21cm, ISBN978-4-8331-4074-4. 図書館界 2011, 62(5): 367-
367

ISSUE DATE:

2011-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/134662>

RIGHT:

(c) 2011 日本図書館研究会

January 2011

新刊紹介

野間口真裕

松林正己 著

続・図書館はだれのものか

ー図書館の未来を求めてー
(中部大学ブックシリーズアクタ13)

中部大学発行 風媒社発売 2010.3
107p 21cm 定価700円(税別)
ISBN 978-4-8331-4074-4

本書は筆者の米国での研修や調査を通じて得た図書館ならびに図書館を取り巻く環境について紹介したものである。【続】というタイトルからもわかるように前作『図書館はだれのものかー豊かなアメリカの図書館を訪ねて』の続編である。内容は多岐に渡り、米国議会図書館からイエール大学・オハイオ大学・ピッツバーグ大学などの研究大学図書館、また研究図書館として分類されるニューヨークの公共図書館の紹介、それらの図書館を支える制度・専門職・組織などの説明がなされ、その時々により筆者の米国の歴史的な背景や日本と比較した考察がなされている。構成は以下のようになっている。

1. アメリカ図書館協会年次総会開催地は首都ワシントン DC
2. 研究大学図書館 歴史と現状から
3. 図書館が支える街ニューヨーク 記憶の街 街の記憶
4. イエール大学図書館ーアメリカ高等教育の父ギルマンの足跡を訪ねて
5. アメリカ研究図書館史調査の現場からーアーカイヴズ史料の意義
6. オハイオ大学図書館の満願成就 李博士のアメリカン・ドリーム

本書はアメリカ図書館協会(ALA) 年次総会への参加の記から始まる。ALA 年次総会といえは2万5千人以上が参加する最大級の専門職参加イベントである。あわせて会場へ向かう途中に立ち寄る議会図書館(LC) の紹介がされている。議会図書館といえは、蔵書数、職員数、予算額すべての点で世界最大規模の図書館である。明示されていないがこの2点だけでも、アメリカ図書館界の大きさ、豊かさが見えたと内容となっている。続く2章は研究大学図書館について語られる。全米の大学図書館の活動とサービスの実態の統計から、人的サービスが提供する品質の問題やトップクラスの研究大学がいかに

野間口：新刊紹介『続・図書館はだれのものか』

激しい競争を経て、研究大学として切磋琢磨しているのか、またそのための基本となる財務面での強化をいかに法律でサポートしているかを説明している。また、大学研究図書館協会(ACRL) や研究図書館協会(ARL)、独立系研究図書館協会(IRLA) の歴史が書かれ、研究大学図書館がいかに整備されてきたのかが書かれている。3章ではニューヨークの図書館が紹介されている。この地区ではニューヨーク公共図書館(NYPL)が有名であるが、メトロ(METRO)と呼ばれる図書館振興財団に加盟する270館を超える図書館が、そのつど関係者と使用者の行動様式と姿勢によって「公共圏」を獲得してきたというエピソードは、いかにこの街が図書館を大切に育ててきたのかがわかる内容となっている。4章ではイエール大学図書館が紹介されている。歴史を紐解きつつ、筆者のイエール大学での体験を通し、「知を愛しみ、その恩恵で仕事を進めるものには、知への畏敬なくして新たな知を育む余地はない。今の日本の大学図書館はこの基本的な本務を忘れようとしているのではないか」と強く語られている。5章ではエヴィデンスとしてのアーカイヴズ史料の意義について語っている。『二十一世紀の研究図書館シンポジウム』の記録より「我々図書館員は学生に対して明証の本質について洗練した理解力を養う訓練を行う必要があります」と引用している。6章はオハイオ大学図書館を ARL 加盟館に押し上げた李博士の努力を紹介するとともに図書館専門職の意義について主題専門家に焦点をあて、「知の理解と実践は、記憶力試験などではなく学位でしか対応できないはずである」と主張され、学位に裏打ちされた書誌編纂、蔵書構築などが紹介されている。

このように本書は107pと非常にコンパクトにも関わらず、停滞している日本の図書館に足りないもの、忘れていたものを語り、エールを送ってくれている。だからこそ副題は「図書館の未来を求めて」としたのだと思う。非常に困難な未来ではあるが、現実的な次の一手を考えさせてくれる図書だと感じた。

最後になるが、本書は準備した原稿が紙幅を超過したため、実は結論が「割愛」されている。続きが中部大学国際人間学研究所『アーリーナ』第9号に「ゾクゾク『図書館はだれのものか』ー豊かな図書館文化を考えるために」というタイトルで掲載されている。ぜひ合わせて紹介させていただきたい。

(のまぐち まさひろ 京都大学経済学研究科・経済学部図書室)